

明治・大正期における別荘地開発
～鎌倉・大磯・藤沢の比較研究～

日本大学 学生会員 ○岡田隆介
松尾工務店 非会員 武井智之
日本大学 正会員 伊東 孝

1. 研究の背景と目的

明治から大正にかけて湘南地域は別荘地として栄え、華族や文武官・作家・医者など、多くの著名人がこの湘南を訪れ、別荘を構えた。明治以降の湘南地域の発展は、主に別荘地の発展に支えられたものといえる。

しかし現在では別荘の数も減り、また当時の別荘について書かれた文献も少なく、栄えていた頃の別荘地の様子を知ることは難しい。そこで、当時の地図や別荘者台帳などから、鎌倉・大磯・藤沢の3地区の明治・大正期の別荘地を比較研究を行う。

2. 湘南地域の別荘地の特色

湘南の海岸は明治以降、別荘地・保養所・海水浴場として開発された。その背景として、

- 1) 明治14年の政変（薩長藩閥政府の専制的な体制を固め、天皇制立憲国家への道を確定した政変）が終わり、政界が安定した。
- 2) 東京・横浜で人口が増加した。
- 3) 保養・休養思想が、医師によって啓蒙され、欧化ブームの中で普及した。
- 4) 東海道線、横須賀線の開通で、交通の便が向上した。
- 5) 温暖な気候と、富士山や相模湾などの眺望に恵まれた。

といった点があげられる。

鎌倉、大磯、藤沢の別荘地の特徴を以下に示す。

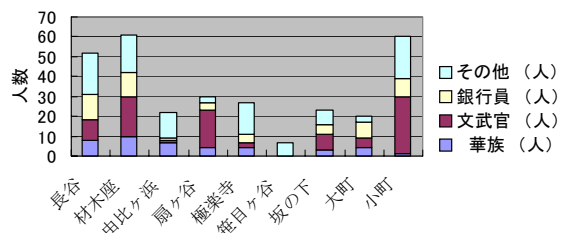
(1) 鎌倉の別荘地の特色

鎌倉は、明治20年7月11日に横浜 - 国府津間の東海道線が開通すると別荘地として脚光を浴びるようになり、明治22年6月16日には横須賀線が開通し、交通の便がさらに良くなった。明治24年では別荘戸数が50戸程であったが、明治38年では200戸内外まで増加し、明治45年には450戸を超え、鎌倉はわが国で最大規模を誇る別荘地になった。その背景には、別荘開発に多く携わった鎌倉倶楽部の存在があると思われる。

鎌倉の別荘所有者を、鎌倉市内における9地域に分け、身分職業別にまとめたものを表-1、グラフ-1に示す。

表-1 鎌倉の別荘所有者の身分と所在地

	華族 (人)	文武官 (人)	銀行員 (人)	その他 (人)	計 (人)
長谷	8	10	13	21	52
材木座	10	20	12	19	61
由比ヶ浜	7	1	1	13	22
扇ヶ谷	4	19	4	3	30
極楽寺	4	3	4	16	27
笹目ヶ谷	0	0	0	7	7
坂の下	3	8	5	7	23
大町	4	5	8	3	20
小町	1	29	9	21	60
合計	41	95	56	110	302



グラフ-1 鎌倉の所在地別累積グラフ a)

これを見ると、華族は長谷・材木座・由比ヶ浜といった海岸線沿いの地域に多く、一方、小町や扇ヶ谷といった内陸部は文武官が多い。これは華族の別荘が夏向きの別荘であったのに対し、文武官の別荘は塩害や砂の吹き込みを避け過ごし易さを求めたためではないかと考えられる。

当時の鎌倉の別荘所有者をみると、薩摩・長州の出身者が80人近くいる。代表的な人たちをあげると、薩摩出身者では、島津忠重・島津忠斎・黒田清輝・松方正義・上村彦之丞・西徳次郎・伊地知幸作・梅江田虎次郎・伊集院五郎・長州出身者では、毛利元昭・井上馨児玉秀雄・大村純雄などがいる。

このように鎌倉は薩摩・長州の出身者が多く、特に薩摩出身者が多い。理由として、島津家の始祖である島津忠久の出生が考えられる。島津忠久は源頼朝の落とし子と言われるている。忠久は近衛家に拾われ、建久3年(1192年)に薩摩・大熊・日向の守護に任じられている。また鹿児島市は、丘陵を背に前面に海が広がった地形で、鎌倉とよく似ている。鹿児島を選んだのも鎌倉に似た地形を求めてであるといわれ、鎌倉に薩摩出身者の別荘が多いのもこのためであると思われる。鎌倉は文武官、なかでも薩摩出身者の町であったといえる。



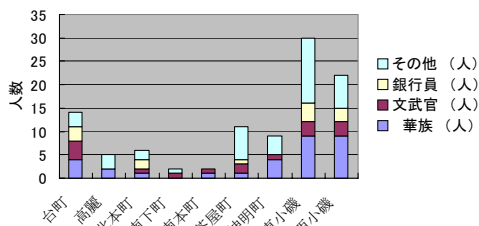
写真-1 旧華頂宮邸^{c)}



写真-2 前田利為邸^{d)}

表-2 大磯の別荘所有者の身分と所在地

	華族 (人)	文武官 (人)	銀行員 (人)	その他 (人)	計 (人)
台町	4	4	3	3	14
高麗	2	0	0	3	5
北本町	1	1	2	2	6
南下町	0	1	0	1	2
南本町	1	1	0	0	2
茶屋町	1	2	1	7	11
神明町	4	1	0	4	9
東小磯	9	3	4	14	30
西小磯	9	3	3	7	22
合計	31	16	13	41	101



グラフ-2 大磯の所在地別累積グラフ^{b)}

写真-1・2は鎌倉の代表的な別荘であり、多くの別荘が西洋民家に見られるハーフティンバースタイルの古典的スタイルの洋館である。

(2) 大磯の別荘地の特色

大磯は、わが国の海水浴発祥の地であり、大磯の別荘は海水浴とともに開発された。この別荘と海水浴場の両方の開発に大きな役割をしたのが、松本順（1832～1907）である。松本は、江戸時代では家茂・慶喜2代の將軍の主治医を務め、明治に入ってから初代陸軍軍医總監を務めた。松本は、岩倉使節団によって持ち帰った別荘・リゾートの思想から海水浴が健康を高めることに注目、大磯が海水浴場に適していることを説き、著名人を大磯の海水浴場に招いた。同時に友人である山形有朋に東海道線の大磯駅の開通を働きかけた。駅が開通すると、次々と別荘が建てられた。

大磯の別荘所有者を、大磯市内における9地域に分け、身分職業別にまとめたものを、表-2、グラフ-2に示す。

これによると、鎌倉の別荘とは対照的で華族の割合が多く、文武官が少ない。また、華族の多くが西小磯・東小磯といった大磯駅周辺に集中している。大磯の別荘所有者には政界の中心人物が多く見られ、伊藤博文・寺内正毅・西園寺公望・大隈重信・山形有朋・加藤高明・原敬などがいる。

これらの人物は、歴代の内閣総理大臣で、この内、伊藤博文・寺内正毅・山形有朋の3人は長州藩である。長州出身者が多いのも大磯の特徴である。



写真-3 旧伊藤博文邸^{e)}



写真-4 旧西園寺邸^{f)}

写真-3.4は大磯の代表的な別荘であり、大磯では伝統的な日本家屋のものが多かった。しかし関東大震災による倒壊が多く、現存するものが少ないのが現状である。

(3) 藤沢の別荘地の特色

藤沢は、鎌倉・大磯と同時期に海岸の開発に着手されたが、鎌倉・大磯の方が先に駅がつくられたので、鵠沼海岸の海水浴場化は多少遅れた。

鵠沼の別荘地は、日本で初めての分譲別荘地で一区画千坪単位で分譲された土地を、181区画用意し、別荘地にはマス目状に道路が配されている。さらに平均170坪単位の区画も分譲していた。一方、鎌倉・大磯の別荘は自然的に発生しており対照的であった。鎌倉の別荘地は藤沢のような造成別荘地ではないため、道路計画があまりなされておらず、現在でも昔の道路網を残している。

3. まとめ

本研究で得た結果を以下に示す。

- 1) 鎌倉の別荘所有者は文武官が多いのに対し、大磯では文武官はあまり見られず、華族が多い。
- 2) 鎌倉は薩摩出身者、大磯は長州出身者といった倒幕勢力の中心人物の別荘が多く存在する。
- 3) 大磯の別荘所有者には政界の中心人物が多い。
- 4) 鎌倉の別荘の多くは海岸沿いに分布している。ただし、文武官は小町・扇ヶ谷といった内陸部に多く見られる。
- 5) 鎌倉・大磯の別荘地は自然的に発生したのに対し、藤沢は分譲別荘地として計画されたものである。湘南地域は、かつて砂丘が広がり、農業に不向きな土地であった。しかし明治に入ってから別荘地開発により、上で述べたような華族・文武官・政界の中心人物などが訪れ、活気あふれる地域になり、現在では緑豊かな高級住宅地へと変貌を遂げた。

最近では、リゾート開発という環境破壊につながると考えられがちだが、湘南地域のように他の開発に不向きな不毛の地を、別荘地開発によって快適な環境を生み出すことも可能であったことがわかる。

< 出展 >

- a) 『現在の鎌倉』 通友社
- b) 鈴木 昇『大磯の今昔』
- c)・d) 『鎌倉別荘物語 明治・大正期のリゾート都市』
- e)・f) 『なつかしの風景 家と街並み』